看 護 学 部

2024 年度一般選抜試験問題

国　　語

注　意　事　項

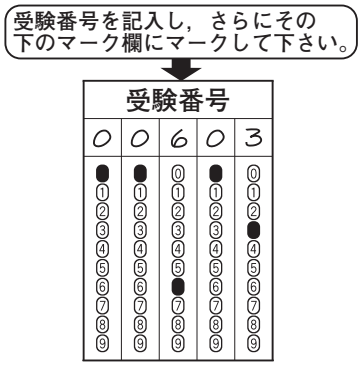
看護学部志願者とリハビリテーション学部志願者では解答すべき問題が一部異なる。

看護学部志願者は 1 ～ 26 と 29 **を解答しなさい。**
リハビリテーション学部志願者は 1 ～ 28 **を解答しなさい。**

1　マークシート式解答用紙が１枚ある。受験番号欄に受験番号５桁を記入し，マーク欄の該当するところをマークしなさい。

氏名を記入してはならない。なお，**記入した受験番号やマークが誤っている場合や無記入の場合は，国語の試験が無効**となる。

（例）



2　マークシート式解答用紙に科目名を記入し，その科目コードをマークしなさい。

科目名	国　語			
○ 英語	○ 数学Ⅰ・数学Ａ		適性能力試験	
● 国語	○ 生物基礎・生物		○ 英語・国語	
	○ 化学基礎・化学		○ 英語・数学	
	○ 物理基礎・物理			

注意事項の続きは本冊子の裏にあります

I　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちの多くは自分のまなざし[A]が固定化しているとは思っていない。自分は人と比べて柔軟な視点を持っており、ガンコ(ア)なまなざしを持っているのは相手だと思っている。自分は他者の意見を受け入れ、その違いにもカンヨウ(イ)で、自由に発想を変えられると信じている。だから普段、私たちは自分の見方を変えたいと思っていない。むしろ柔軟でない相手や融通の利かない物事を変えたいと思っている。

私たちが見方を変えるのは、自分にとって都合の悪いことが起こったときだ。社会や他者や物事との関係の中で自分にとって不都合な状況が生じたときに、私たちはそれを何とか切り抜けるために見方を変えようとする。アイデアに行き詰まったとき、人間関係がうまくいかないとき、日々の生活で困ったことが生じたとき。そしてその物事がどうにも変えられないとき、経験や知識のハンイ(ウ)で私たちは見方を変えようとする。だがその場合に私たちが変えるのは自分自身への認識ではなく、表面的な物事の解釈であることが多い。

物事の解釈を変えることも見方を変えることではあるのだが、それは自分の欲求に合わせて都合よく見方を変える場合が多い。そこでの見方を方向づける欲求そのものは自分の深い部分で固定化しており、それには気づかない。私たちは物事の解釈を変更することで、日常の問題であれば何とか乗り切れるかもしれない。だが、深刻な事態が起こったときには、それだけではうまくいかなくなる。生死にまつわるようなこと、自分のアイデンティティの危機、混乱した状況や先行きの全く見えない社会不安。そんな場合に私たちは根本的な見方を変える必要性に迫られる。

そもそも、見方を変えるのはそう簡単なことではない。これまで長い時間をかけて培ってきた自分の根幹に関わることほど、見方を急に変えるのは難しい。それにはとてもエネルギーと努力が必要になるのだ。特に社会に大きな変化が訪れるときや、答えのない深刻な問いが自分に突きつけられ、根本から見方を変えねばならない状況になるほど、私たちはこれまで以上にますます自分のまなざしを固定しがちだ。自分の見方が間違っていると改めるよりも、自分の見方は間違っていないことを確認する方

向に物事の解釈を変更する方が私たちには容易(たやす)い。

しかし、何とかしてようやく自分の認識を変えることができたとしても、また次から次へと深刻な事態が続くような状況に陥るとどうだろうか。今度は、B私たちは自ら進んでまなざしを固定化することを選ぶのである。答えが定まらない不安定な状態は、私たちに大きな苦痛を強いる。その不安の激流に流されてしまわないように、何か答えを決めてそこから動きたくない気持ちが強まるのだ。だから状況が厳しくなるほど、自分の都合の悪いものは視界から追いやって、自分が見たい部分や一度信じたことにだけ目を向けがちになる。そんな状態を繰り返しているうちに、私たちのまなざしはもう変えられないほど固定化してしまう。

こうして一度信じ込んでしまうと、その物事の別の側面を見せられても、私たちにはそれが事実には見えない。いくら妥当性がある理屈が並べられても、自分の信念に合わないものを間違っているとする方が、私たちには容易い。自分の見方を正当化してくれる情報や理屈、権威を追い求めるようになると、それがまた自分の見方をますます強めていく。そして次第に自分と反対の見解や立場を突きつける相手を敵視したり、見下したりする態度を示すようになる。

小さい頃から教育されてきた知識、長年にわたって社会で信じられてきた概念、多くの人が口にする情報。それらは繰り返し唱えられるものほど私たちの中に強く刻まれ、それはいつしか自分自身の信念や考え、感覚として自分の無意識に深く入り込んでいく。自らが固く信じて疑わない見方、つまり私たちのまなざしが固定化した状態は「固定観念」あるいは「偏見」と言い換えられる。それが社会にまで広がったものを、私たちは「C常識」と呼ぶ。だが、アインシュタインも常識とは18歳までに身につけた偏見のコレクションと指摘したと言われるように、常識とはまなざしが固定化したものにほかならない。

そんな常識を前提にして、社会ではさまざまなことが動いている。政府の政策、経済の変動、科学のD通説、それにもとづいた産業、そして日々の生活。それらはそれぞれ個人の信念だけでなく多くの人々の常識と利害が関係している。だからこれまでの常識とされることが根本的に覆(くつがえ)されることが起こると、それに抵抗する力はより大きくなる。

何か前提を変えてしまうような世紀の発見があったり、根本から産業コウゾウ(エ)を覆す新しい発明が起こったようなときでも同

様である。それによってこれまでの常識のもとで積み上げてきた莫大な利益が失われるのであれば、社会は［Ⅰ］な態度をとるだろう。全ての常識やシステム、教科書や方程式を根本からつくりかえねばならないのであれば、(オ)ソウリョクを上げてそれをなかったことにしようとするかもしれない。

危機に際しても同じことが言える。この世界的な危機や混乱を生み出す前提が、もし何らかの理由で間違っており、それが次の常識を生み出してしまったとすれば。その前提をつくることに関与し積極的に吹聴(E)してきた人々、例えば専門家や権威、政治家や企業などにとっては、とても不都合なことになる。あるいはその常識にもとづいて社会的に拳を振り上げ、声高に正当性を主張していた人々は拳を下ろす先を失ってしまう。だからもし自分の主張が間違いであったことに気づいたとしても、これまで前提にしてきた見方を変えるにはとても勇気が必要になる。

［Ⅱ］社会がその者たちに責任を負わせようとすればするほど、素直に見方を変えるどころか都合の悪い事実が表に出ることを隠蔽し、歪曲し、演出しようとするだろう。あるいは、反感を寄せる社会のほとぼりが冷めるのを待ち、これまでの責任を回避しようとするかもしれない。いずれにせよ、自らの常識を根本的に変えるよりも、物事や出来事、事実の解釈を変えることを選択しがちである。

だから混乱が大きくなればなるほど、社会では次の常識を巡る「まなざしの戦い」(F)が始まる。そこには、さまざまな力が巧みに私たちのまなざしをデザインしようと仕掛けており、どの見方もそれらしく見えるようにプレゼンテーションされる。そんな観点からインターネットを注意深く眺めると、多様な見方が並べられていることに気づくだろう。

その中には科学的でないものも溢れているし、客観性を装いながら根拠のなさそうなものもたくさん見られる。しかし私たちがこれまで当たり前としてきた社会の仕組みや科学的な常識を覆すような情報や証拠も共有され始めているのだ。それらの全てが［Ⅲ］を欠いた説明であるとは必ずしも言い切れないように思える。一方で、あまりにもたくさんの情報に溢れ、そのどれもが正反対を主張する中、今や何が事実で何が正解なのかの判断は簡単には下せなくなっている。そんなときこそ、改めてもう一度、「常識とは何か」について確認する必要があるだろう。

（ハナムラチカヒロ『まなざしの革命』による）

問1 傍線部(ア)〜(オ)に該当する漢字を含むものを、次の各群のa〜eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 1 〜 5

(ア) ガンコ 1

a ガンジョウな建物に避難する
b 顕微鏡ではなくニクガンで見る
c ガンセキの落下防止の対策をする
d 知育ガングの販売をしている
e コウガン無恥な態度にあきれる

(イ) カンヨウ 2

a 今年度の新入生のカンゲイ会を計画する
b カンビな音楽が心地よい気分にした
c 店長のカンダイな計らいに感謝した
d 彼はここでもイカンなく実力を発揮した
e 契約した医療保険のヤッカンを確認する

(ウ) ハンイ 3

a ハンザツな作業に時間がとられる
b 未曽有の豪雨で川がハンランした
c 参加者に新製品がハンプされた
d 私は下級生のモハンになりたい
e 舞台に大道具をハンニュウする

（エ）コウゾウ

4

a　私の父はテッコウ所で働いている
b　家の近くのソッコウに誤って落ちた
c　車の雑誌を定期コウドクしている
d　駅のコウナイにつばめが巣を作った
e　最新のコウウン機を取り入れた農業

（オ）ソウリョク

5

a　船舶のソウジュウの仕方を兄に習う
b　歴代の内閣ソウリ大臣の写真を見た
c　彼の戦略がソウコウして成功した
d　彼女はソウギョウシャ一族の末裔（まつえい）だ
e　彼はソウダイな計画を立てている

問2　傍線部A「自分のまなざし」とあるが、これについての説明として**適当でないもの**を、次のa～eの中から一つ選びなさい。

6

a　人は自分のまなざしの変更が必要な状況になるほど、自分のまなざしを固定してしまいがちになる。
b　自分にとって都合が悪い状況で人はまなざしを変えようとするが、不十分なものであることが多い。
c　まなざしの変更なしに人は難局を乗り切ろうとするが、それが可能な局面とそうでない場合がある。
d　人は自分のまなざしは柔軟なものだと思っており、自分のまなざしを変更したいとも思っていない。
e　人はまなざしが硬直化しているという他者の指摘を拒絶し、逆に他者やその意見を変えようとする。

問3 傍線部B「私たちは自ら進んでまなざしを固定化することを選ぶ」とあるが、なぜそうするのか。その理由の説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 **7**

a 自分にとって都合の悪い事態に対しては、まなざしを固定化することで解決することができると思っているから

b まなざしを変えるという行為は大きな苦痛を強いられるので、まなざしを固定化することが快適に感じられるから

c まなざしを固定化することで、次々起こる深刻な事態を乗り切るために必要なエネルギーを確保する必要があるから

d 立て続けに迫る深刻な事態に対して、まなざしを固定化して答えを定めると不安の波に飲みこまれなくて済むから

e まなざしを固定化すれば、周りの人の不安な気持ちに流されることもなくなり穏やかに過ごすことができるから

問4 傍線部C「常識」とあるが、筆者はここで「常識」とはどのようなものだとしているか。その説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 **8**

a 人間が成長する過程で得た知識や概念・情報が、個人の信念や考えや感覚となり、それらが社会において他とは違った特別なものの見方として定着したもの

b 自分と反対の見解をもつ相手を敵視したり、見下したりする態度によって出来上がった個人の固定化した考えが、ある共通点を持って世間に広まったもの

c 生活の中で繰り返し唱えられたものの考え方が、個人の無意識に深く入り込むことでまなざしが固定化した状態が生まれ、その状態が社会で一般化したもの

d 小さい頃からの積み重ねによって深く心に刻まれた「固定観念」が、社会生活によって洗練され、その個人特有のものとして社会で尊重されるようになったもの

e 個人の信念や多くの人の利害が関係して出来上がった固定化されたまなざしが、社会において他のまなざしと融合しながら、広く通用するようになったもの

問5　傍線部D・Eの意味として最も適当なものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

D [9]　・E [10]

D　通説

a　古くから言い伝えられている説
b　世間で広く認められている説
c　今までになかった新しい説
d　専門家たちの間で認められた確定的な説
e　世間に伝わっている根拠のない説

E　吹聴

a　多くの人に触れ回ること
b　自分の主張を公にすること
c　嘘(うそ)をついて人を騙(だま)すこと
d　精一杯の努力をすること
e　相手の話を熱心に聞くこと

問6　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語として最も適当なものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。Ⅰ 11 ・Ⅱ 12 ・Ⅲ 13

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
a 挑戦的	a それに	a 斬新性
b 保守的	b ただし	b 一貫性
c 懐疑的	c けれども	c 脆弱性（ぜいじゃくせい）
d 破壊的	d すべからく	d 協調性
e 協調的	e たとえば	e 妥当性

問7　傍線部F「まなざしの戦い」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 14

a　多様な見方を並べて利点を強調し、これまでの「常識」への執着を捨てさせようとすること

b　次の「常識」となる多様な新しい見方のうち、どれが最も優れているかについて争うこと

c　多様な見方のそれぞれが、次の「常識」になるために、個人の見方を誘導しようとすること

d　これまでの「常識」が本当に正しいのかどうかを、個人がもう一度考え、確認すること

e　多くの情報の中から正解を選ぶために、「常識」とは何であるかを自分自身で考えてみること

問8 本文の内容に合致するものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 **15**

a 私たちは自分の根本的な見方を変えることは容易ではないので、自分の根幹に関わる問題が発生しない限り、物事の解釈を変更することはない。

b 社会の動きには多くの人々の「常識」と利害が関係しているので、たとえそれが間違っていたとしても、その「常識」を変えるのは不可能である。

c 「常識」が覆されるとき、そこに現れる新たな「常識」には多様な見方が含まれているので、その中から新たな「常識」を各自で選ばなければならない。

d 世間一般では正しいと思われている「常識」なるものは不変ではないことを認識し、改めてどのようなものであるかを考えてみるとよい。

e 社会の出来事と連動して作り変えられていく「常識」に対して、私たちは何が正解なのかを常時疑う姿勢を持つようにしていかなければならない。

II 次の文章はフランスの詩人、小説家であるポール・ヴァレリー（一八七一～一九四五）について述べたものである。これを読んで後の問いに答えなさい。

パリにいると、ときどきフランス人の挨拶や講演を聴く機会がある。そんなときつくづく思うのだが、彼らは十分な準備もなくその場の思いつきで話したりは決してしない。なかでもヴァレリーの講演は、あらかじめ考え抜かれた原稿をもとに話しているので、内容も表現もそのまま印刷にまわせるくらい推敲（すいこう）されている。これは一般にフランス人が行う講演について言えることで、彼らの言葉によるパフォーマンスは肉声となった思考そのものに接する体験であって、ときには一冊の本を読み終えたあとのような感動を与えられることがある。おそらくその背景には古代ローマ以来の雄弁術の伝統がいまも根強く残っているからなのだろう。

それはさておいて、ここで彼の歴史の見方[A]というのを手短に紹介しておくと、こういうことになるだろうか。

歴史というのは、有史以来、数千年にわたって人類が経験した出来事の集積とそこから抽出された知恵の宝庫と一般には思われがちである。ところが歴史として後世に残された出来事は、それこそ無数といっていい出来事のなかから、歴史家がそれぞれ重要だと判断した度合いにしたがって選択されたものである。選択がある以上そこには何らかの判断が働いている。彼がある一つの歴史的事実、たとえばフランス革命を取り上げて、それについてどれほど良心的で公正で、要するに客観的であろうと努めても、事実について何らかの判断を下すとなれば、それぞれの歴史家に固有の個性を脱ぎ捨てるわけにはいかない。みずからの「人格や、本能や、興味や、独自の物の見方を排除すること」は、彼の人間性を放棄するのとおなじことでほとんど望めることではない。それゆえ歴史において「重要性というものはまったく主観的なのであり」、「確かなものはあいまいであり、現実とされるものには無限の解釈を施すことができるのである」。歴史が、ヴァレリーの精神にとって、幾何学や物理学のように、ついに厳密な科学になり得なかったのは「観察者を観察される事柄から、歴史を歴史家から分離することが不可能」（以上、「歴史についての講演」一九三二年）だからなのだ。要するに、彼にとって「歴史は知性の化学が入念に作り上げた危険きわまりない産物」（「歴

史について」一九三一年）であるほかはなかった。

これはしかし、科学としての歴史を否定しているのであって、歴史そのものの否定ではない。歴史がかつてあったことは、否定するしない以前の自明のことである。問題は（ア）ジュンスイな事実と思われる事柄をどう解釈するかにかかっているが、解釈されたある事実が現実の歴史的事実だったかどうかはだれにも保証することはできない。

こうしてヴァレリーは、歴史の客観性に徹底して批判的な見方を語っておいてから、ヨーロッパにとって焦眉（しょうび）の問題である

I に話を進めたのである。

ところで、ヴァレリー自身がリセ[*1]の最終学年にあたる修辞学級（レトリック）、現在の最上学級（プルミエール）というのに在籍したのは一八八七年のことであった。

ちなみにこの西暦年を日本の暦に直すと明治二十年にあたる。後進国の日本が西欧化を推し進めるなかでその動きの象徴ともなった鹿鳴館（ろくめいかん）が落成したのはその四年前のことにすぎない。一方ヴァレリーがリセで最後の年をすごしたのは西欧の文化が円熟しきったいわゆる世紀末の時代であり、祝辞[*2]を述べた年をさかのぼること四十五年も前のことであって、壇上に立った彼はこのときすでに六十歳を越えていた。

B ヴァレリーは、講演のなかで、その遥（はる）かな昔を回想した。

あの頃のパリは、街の大通りを行くのは馬や馬車ばかりで、自動車などというものは影も形もなかったのです、と語って、若い生徒たちの想像を世紀末のパリへといざなった。

しかしそれは古き良き時代のおもかげを彼らの脳裡（のうり）に浮かばせるためではなかった。そのかつての時代とヴァレリーが講演を行った日を隔てる半世紀ばかりの年月は、人類の文明の歴史にそれまで想像もできなかったまったく新しい科学的発見や発明をもたらし、それによって従来の生活習慣から物の考え方や感じ方に至るまですべてが一変していた。彼がまだ若かった（イ）オウジを語ることは、その後のはげしい変貌の実際を若い生徒たちに実感してもらうためだったのである。

そんなわけでヴァレリーは、人知が驚くほど短い期間に競いあうようにして実現させた、たとえばアインシュタインの時空の観念に革命的な変化をもたらした相対性理論や、身近なところではレントゲンによるX線の発見など、多岐にわたる発見や発明を巧みに話に織り込みながら、自分がリセの生徒だった世紀末の、まだどこかに牧歌的(C)な趣きが漂っていた街のありさまを回想して、こんなふうに語って聞かせた。

このおなじ〔一八〕八七年には、大気はどこまでも本物の鳥たちだけのものでした。電気はまだ電線を無くしてはいませんでした。固体はまだ十分に固かったし、不透明な物体はまだあくまでも不透明でした。ニュートンとガリレオは平和にこの世に君臨していました。物理学は幸福でしたし、その規準は絶対的だったのです。「時間」は平穏な日々を送っていました。つまりどの一時間も「宇宙」を前にしてすべて同一だったのです。「空間」は無限であり、(ウ)キンシツであることを享受していて、その厳かな懐(ふところ)のうちで起きるいっさいのことには完全に無関心でいました。「物質」は正しい善なる法則のもとにあるのを感じていて、よもや極小の世界では法則を変更することになり、――このブンカツの深淵(しんえん)(エ)にあっては法則の概念すら失うに至るとは夢にも思っていなかったのです。

（「歴史についての講演」）

こう語ったあとで、彼の話はいまの時代にもどって来て、ニュートンやガリレオの法則がまだ行き渡っていた世紀末の穏やかな時代が一気に変貌してしまったことを告げたのである。

こういう状況はいまではもうすべて夢まぼろしにすぎません。すべては変わってしまいました、ちょうどヨーロッパの地図や、地球の政治的な表面や、私たちの街の外見や、私のリセ時代の友人たちが〔名だたる著名人に〕変わってしまったのとおなじようにです。

（同前）

こうしてヴァレリーは二つの時代のあいだに生じた著しい変化を生徒たちに強く印象づけた。それにはある狙いがあった。世の中の変化というものは、時の流れにつれていつの時代にも見られることであっても、世紀末から二十世紀の二、三〇年代にかけて見られた変化は尋常一様なものではなかった。一八八七年の時点で手に入るあらゆる知識を動員し、想像力の限りを尽くしても、果たして現在の変貌のありさまを予測できた人がいただろうか。

狙いというのは、時代の変貌を予測することが近代ではまったく不可能になったことを目の前の若者たちにわかってもらうことだった。

一八八七年のもっとも偉大な学者でも、もっとも深遠な哲学者でも、もっとも見通しに明るい政治家でも、わずかに四十五年がすぎたあとで私たちが現に目にしていることをせめて夢想するだけでもできたでしょうか。いったいどんな精神の働きがあれば、一八八七年に蓄積されたあらゆる歴史的な資料を扱って、過去のもっとも該博な知識から、たとえごく大雑把にではあっても、一九三二年の現状がどうなっているかを推論することができたでしょうか。そんなことは思いも寄らないことなのです。（同前）

それにしても、なぜヴァレリーは、過去の知識から未来を予測するのが不可能になったことをこれほど強調しなければならなかったのか。その理由というのは、わたしたちが当然と思っている歴史に対する態度にあった。彼はその態度をこう説明する。

もし「歴史」が単なる精神の気晴らしに終わらないとすれば、それは私たちが歴史からあれこれ教訓を引き出せると期待しているからです。私たちは過去の知識から何かしら未来の予見を推論できると考えているのです。（同前）

理由というのは、われわれがとってきたこの歴史依存の態度がもはや通用しなくなったことを肝に銘じさせるためだったので

ある。実際、ヴァレリーは「歴史について」のなかで、「先の〔第一次世界〕大戦によってなにが打ち砕かれたかといって、予見できるという思い上がり以上に打ち砕かれたものはなに一つなかった」と書いていた。それほど世界は根底から変貌してしまったのである。だからいまの危機的な時代に重要なことは、その「思い上がり」を捨てて、過去にその例を見ない現代の世界を冷静に見つめることなのだ。

たしかに十九世紀の初めまでは過去の歴史は未来を予測するのに有効だった。それは世の中の動きが十年一日のごとくゆるやかで、歴史がおなじことの連続に見えたからである。それが十九世紀とともに科学が急速に発達しはじめて、二十世紀に入るとその科学技術の影響をうけて世の中は目まぐるしいばかりの変化を来して、過去の教訓は現在の混乱した状況を乗り越えるためにも、未来の変化を予測するためにもなんの役にも立たなくなった。

ところが、人びとは［Ⅱ］として歴史に教訓を求めている。それは歴史は繰り返すものと思いこんでいるからだ。ヴァレリーはその認識の危うさにいち早く気づいてケイショウ(オ)を鳴らしたのである。

（保苅瑞穂『ポール・ヴァレリーの遺言』による）

（注）*1 リセ――フランスの後期中等教育機関で、日本の高等学校にあたるもの。
*2 祝辞を述べた年――一九三二年。この年の七月十三日にヴァレリーは、リセ・ジャンソン＝ド＝サイイーでの賞品授与式、日本風にいうと学年末の終業式に主賓として招かれて、祝辞を述べた。

問1 傍線部(ア)〜(オ)に該当する漢字を含むものを、次の各群のa〜eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 16 〜 20

(ア) ジュンスイ 16

a 企業はリジュンを追い求めて成長する
b 花嫁はジュンパクのドレスに身を包む
c ジュウジュンな性質の犬種を飼う
d 宗教弾圧でジュンキョウシャが出た
e 二国間で通商条約をヒジュンした

(イ) オウジ 17

a 祖父のためにオウシンを頼む
b オウトツを合わせて接続する
c オウボウな政治に批判が集まる
d 彼にはオウセイな好奇心がある
e オウケンが革命勢力に倒される

(ウ) キンシツ 18

a 子供にキントウにお菓子を分ける
b 両国のキンミツな関係が続く
c 彼女のキンロウ意欲は素晴らしい
d 一週間のキンシンを受け入れた
e 刃物の持ち込みはゲンキンである

（エ）ブンカツ

19

a　カツゼツの悪さを改善する
b　先生のイッカツで静かになった
c　ショカツの税務署に赴く
d　問題をホウカツ的に議論する
e　紙面の都合で記事をカツアイした

（オ）ケイショウ

20

a　身内のケイジに際しお祝いを贈る
b　運動靴のケイリョウ化に挑んでいる
c　すれ違いざまにケイテキが聞こえた
d　残酷なケイバツは禁止されている
e　電気ケイトウの故障で一日停電した

問2　傍線部A「彼の歴史の見方」とあるが、ヴァレリーは歴史をどのようなものと見ているか。その説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

21

a　歴史というものは、歴史家が知っている限りの人類の経験と知恵の宝庫である。
b　歴史というものは、歴史家の選択に従って作られた事実とは相反する幻想である。
c　歴史というものは、歴史家の固有の個性に裏打ちされた事実に対する判断である。
d　歴史というものは、歴史家が客観的に下した判断に基づいて選択した事実である。
e　歴史というものは、歴史家自身が経験した出来事から抽出した知恵の宝庫である。

問3　空欄 Ⅰ ・ Ⅱ に入る語句として最も適当なものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。Ⅰ 22 ・Ⅱ 23

Ⅰ
a　現在の科学の発展
b　筆者の時代に対する考え
c　現代社会の変貌と混乱
d　穏やかな時代への回顧
e　歴史の示す教訓

Ⅱ
a　常住不断
b　現状維持
c　不易流行
d　諸行無常
e　旧態依然

問4　傍線部B「ヴァレリーは、講演のなかで、その遥かな昔を回想した」とあるが、なぜこのようなことをしたのか。その理由の説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 24

a　聴衆の想像を世紀末のパリへといざない古き良き時代のおもかげを脳裡に浮かばせるため
b　ヴァレリーがリセ在学中に経験した時代のはげしい変貌を若い生徒たちに実感させるため
c　世のはげしい変貌は時の流れにつれていつの時代にもあることを生徒たちにわからせるため
d　あとで語る内容との隔たりを感じさせ、時代がはげしい変貌を遂げたことを印象づけるため
e　ヴァレリーの言う二つの時代に共通する変化が特別なものであったことを強調するため

問5　傍線部C・Dの意味として最も適当なものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

C 25 ・ D 26

C　牧歌的

a　素朴でのんびりした様子
b　古めかしく野暮ったい様子
c　平和で穏やかな様子
d　夢があって心躍る様子
e　懐かしく郷愁を誘う様子

D　該博

a　他にはない重要なこと
b　状況に合っていること
c　何にでも通じていること
d　専門的でくわしいこと
e　間違いがないこと

〈リハビリテーション学部志願者のみ解答してください〉

問6 傍線部E「わたしたちが当然と思っている歴史に対する態度」とあるが、「わたしたち」は歴史に対してどのように思っているというのか。その説明として**適当でないもの**を、次のa～eの中から一つ選びなさい。 **27**

a 歴史はわたしたちに教訓を与えるものである。

b 歴史から未来の変化を予想することができる。

c 歴史は科学技術の急速な発展に寄与してきた。

d 歴史は未来永劫（えいごう）に繰り返していくものである。

e 歴史は同じようなことの積み重ねでできている。

〈リハビリテーション学部志願者のみ解答してください〉

問7 本文の内容に合致するものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 **28**

a ヴァレリーのようなフランス人の講演はあらかじめ考え抜かれた原稿をもとに話されることが多く、古代ローマ以来の雄弁術を彷彿（ほうふつ）とさせる動きを交えたパフォーマンスを体験することができる。

b ヴァレリーは歴史を「知性の化学が入念に作り上げた危険きわまりない産物」であると評し、幾何学や物理学のように厳密な科学とはなり得なかった点を指摘し、その存在を否定している。

c ヴァレリーは講演のなかで十九世紀末から二十世紀のはじめに見られた時代のはげしい変化について述べ、このことをきっかけに、自身の歴史に対する態度を省みたことを述べている。

d ヴァレリーはその著書のなかで、歴史によって先を予見できると考えることを「思い上がり」だと捉え、その「思い上がり」を捨てて現代社会の様相を注視することを奨励している。

e ヴァレリーは歴史について、現在の混乱を乗り越え、未来を予測するための唯一の手段だと考えていたが、科学技術が発展した現在ではその効力は発揮できないと指摘している。

〈看護学部志願者のみ解答してください〉

問8 この文章の中でヴァレリーは「歴史」に対する認識を改めた経験を述べている。このように、あなたが従来の認識を改めた経験とそこから得た学びについて、本文の内容を踏まえ、二百字以内で解答用紙に述べなさい。 **29**

注 意 事 項 続 き

3　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。マークは**HB**または**B**の鉛筆（シャープペンシル可）で濃くマークしなさい。解答用紙を折ったり曲げたりしてはならない。

例えば　2　と表示のある問に対して**c**と解答する場合は，次の（例）のようにマークシートの**2**の**解答欄**の**c**に**マーク**しなさい。

指定欄以外へマークした場合は解答が読み取れなくなる場合があるため，記入しないこと。訂正は，消しゴムできれいに消すこと。

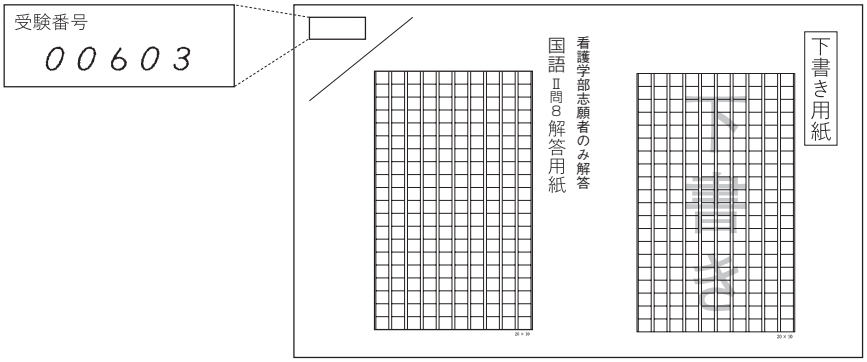
（例）

解答番号	解答欄				
	a	b	c	d	e
1	ⓐ	●	ⓒ	ⓓ	ⓔ
2	ⓐ	ⓑ	●	ⓓ	ⓔ

（マークの仕方）

良い例	悪い例
●	◐ ⊗ ◑ ◕

4　**看護学部志願者にはマークシート式解答用紙に加えて記述式解答用紙**の受験番号欄に受験番号５桁を記入しなさい。氏名を記入してはならない。



5　試験終了後には，リハビリテーション学部志願者は問題冊子の上にマークシート式解答用紙を裏返して置きなさい。看護学部志願者は問題冊子の上に記述式解答用紙，その上にマークシート式解答用紙を裏返して置きなさい。解答用紙の回収後は監督者の指示に従うこと。

6　問題冊子は持ち帰ること。